

# 情報検索ガイダンスで 「はじめてのレポート作成」を担当して —学部垣根を越えた学びの試みとして—

教職教育部 教授 富岡 勝

## はじめに

平成 25 年 4 月、中央図書館の方より、ある依頼を受けた。中央図書館で 6 月と 10 月に実施している情報検索ガイダンス月間に、初めての試みとしてレポート・論文作成に関する教員による講座を開いてほしいということであった。私は東大阪キャンパスの教職課程の「教育の思想と歴史」や「特別活動の理論と方法」などの授業を担当しており、レポート作成法に関する専門家という訳ではなかったが、「初めての試み」という言葉にちょっと興味を惹かれ、以下のように 2 年間で合計 4 回の講座を担当した。いずれも火曜日の 3 時限目（13 時 10 分～14 時 40 分）、中央図書館 2 階第 1 演習室で実施した。

- ① 平成 25 年 6 月 11 日  
「はじめてのレポート作成 設題に正確に答えよう」
- ② 平成 25 年 10 月 15 日  
「はじめてのレポート作成 アウトラインをつくりながらレポートを執筆しよう」
- ③ 平成 26 年 6 月 24 日  
「はじめてのレポート作成 先輩たちの苦労と工夫」
- ④ 平成 26 年 10 月 21 日  
「はじめてのレポート作成 アウトラインをつくりながらレポートを執筆しよう」

6 月にはレポート執筆の前提となるようなごく基本的な事項を学び、10 月には良いレポートを作成するための方法の一つであるアウトラインづくりを経験しようというもので、おもに新入生を対象に、レポート執筆の入門編というつもりで準備した。参加人数は、20 名

から 50 名ほどであった。

## 事前準備として、様々な学部の学生対象にアンケート調査

しかし、新入生対象のレポート作成指導というのなら基礎ゼミで実施される筈であり、わざわざ中央図書館のガイダンスで実施する必要はないのではないか、という疑問を抱く方があるかもしれない。たしかに、基礎ゼミを補完する役割というだけではそれほど面白くないかもしれない。

そこで、学部垣根を越えて様々な専門分野の学生が集まる教職科目を担当している、という利点を生かし、同僚教員の協力を得ながら教職科目を受講している学生を対象に、レポートに関する以下のような記述式のアンケート調査を実施した。調査した学生の人数は、平成 25 年 169 名、平成 26 年 134 名と決して多くないが、アンケート結果集計作業が膨大になるのを恐れて 150 名前後を対象とした。学部ごとの内訳は、平成 25 年度の場合、法学部 24 名、経営学部 28 名、理工学部 53 名、文芸学部 43 名、経済学部 7 名、総合社会学部 7 名、短期大学部 6 名、不明 1 名であり、いわゆる文系学部と理系学部の両方をカバーしている。学年は、2 年生と 3 年生が中心であった。

アンケートでの調査項目は、以下の平成 25 年度の質問用紙にあるように、「これまでに書いたレポートの設題例」「レポート執筆の苦労」「レポート執筆の工夫」の 3 点とした。

こうした項目で調査することによって、学部や学科によって多様な形式のレポート設題があり、また設題の傾向によって学生が苦労

**レポートに関するアンケート**

(2013年5月実施 アンケート実施者 教職教育部 近岡 幸一 [kimokami@kandai.ac.jp](mailto:kimokami@kandai.ac.jp))

1. あなたの学部と学年を教えてください。  
 学部 \_\_\_\_\_ 学年 \_\_\_\_\_

2. あなたの受講している授業(教養科目、専門科目、教職課程などすべて)でこれまでに書いたレポートの設題のうち、印象に残っているものを三つ教えてください。設題内容は、詳しく正確なほうを有り難いですが、覚えていない範囲でも結構です。

これまで書いたレポートの設題例①  
 \_\_\_\_\_

これまで書いたレポートの設題例②  
 \_\_\_\_\_

これまで書いたレポートの設題例③  
 \_\_\_\_\_

3. レポートを書いていて、苦労したことがあったら教えてください。

\_\_\_\_\_

4. レポートを書いていて、工夫したことがあったら教えてください。

\_\_\_\_\_

有り難うございました。

アンケート提出先 11号館5階南側の近岡研究室ドア左のポスト  
 アンケート提出期限 2013年5月31日

平成25年度に実施したアンケートの質問用紙

している点も少しずつ異なっていることを示すことができた。例えば、理科系の授業での実験レポートでは、「何を書けばよいのか分からない」という苦労は比較的少なく、指定字数に合わせることや正確な表現で執筆することなどの点で苦心する傾向があったのに対し、いわゆる文系学部では、あるテーマについて調べたり考察したりすることを求める設題のレポートがあり、そうしたレポートでは学生は「何をどのように書いたらよいかわからない」と困ることが多い、という傾向があることも明らかになった。

こうしたアンケートの結果を一覧表にまとめてガイダンス参加者に見せることで、まずレポートの設題内容の傾向の違いによって学生が苦労する点が異なり、工夫すべき点も少しずつ違っていることを、本学の学生の事例を通して具体的に示すことができる程度ではないか、と思われる。

#### グループワークの実施

またレポート作成法の解説だけでなく、30分間ほどのグループワークをガイダンスの中で

実施した。2名から3名のグループでの話し合いを経験することで、参加した学生が自分の考えを深めたり、自分の意見に自信を持ったりにすることに少しでもつながればよいのではないかと考えたためである。

平成25年度のガイダンスでは、グループワークの内容を多く盛り込みすぎて、あまりスムーズなグループワークができなかったが、平成26年度は、以下のようなテーマと具体的手順を用意することで、前年度に比べると比較的スムーズなグループワークを実施することができた。

(平成26年6月のガイダンスのグループワーク)

#### テーマ

「レポートアンケートの結果を読み、①とくに注目した「苦労」と「工夫」とその回答の通番号、②自分ならどのような工夫をしてみたいか について、カード(正方形のポストイット)と台紙(A4サイズ)を利用して2～3名の班で話し合う」

#### 手順

1. ポストイットのカードは、1人10枚程度(不足したら追加を取りに来て下さい)を、1内容ごとに1枚使って、テーマ①とテーマ②についての自分の意見を記入する。
2. ポストイットには要点のみを、なるべく太く大きな文字で書く(1枚あたり10文字から15文字が目安)。
3. 似た内容のカードをまとめていくつかのグループを作り、A4サイズの台紙に貼り、グループごとのキーワードを大きく記入する。
4. 指名されたグループは、教室の前で教材提示装置を使って台紙をスクリーンに映して簡単な発表をする。

以上のように、レポートの書き方を一般的に説明することにとどまらず、アンケートや

グループワークによって様々な学部の学生の状況をもとにレポート作成についての講座を試みた。

平成27年度には「はじめてのレポート作成」の講座は、教職教育部からは、同僚の杉浦健先生と光田尚美先生に引き継がれ、新たな実践として取り組んでいただいている。

#### 大学図書館で教員が講座を担当することの意味

こうした講座を中央図書館の企画の一つとして実施することの意味を考えるため、「近畿大学学術情報リポジトリ」を利用して、本誌のバックナンバーから関係しそうな記事を探した。その結果、以下の記事を見つけることができた。

- ①高木宏幸「館内見学ツアーに参加して」(第33号、2005年1月、p2～p5)
- ②加藤習子「データベース体験講座ができるまで」(第35号、2006年10月、p27～p28)
- ③中尾民子・栗原さとみ「近畿大学中央図書館の利用者教育について」(第36号、2007年10月)、p13～p17)
- ④近藤明子「中央図書館のガイダンス・講習会案内」(41号、2011年10月、p23)
- ⑤北爪佐知子「図書館のグローバリゼーション」(第45号、2013年10月、p1～p3)
- ⑥出田善明「変わりゆく図書館——新図書館プロジェクト活動報告」(第46号、2014年3月、p17～p18)

記事①～記事④によって、10年ほど前から利用者に対する図書館の教育機能に力が入られるようになり、基礎ゼミ対象(希望制)の館内見学ツアー、データベースの講習会や体験講座などが実施されるようになったこと、記事⑤と記事⑥によって近年、「学部の垣根をこえて議論を行う機能の付与」などが新図書館構想の一環として検討中であることが分かった。

こうした動向を踏まえるならば、様々な学生が学部の垣根を越えて集まる中央図書館

で、複数の教員が方法を工夫しながら実施する「はじめてのレポート作成」講座は、学部の垣根をこえて学生が議論しながら学び合う教育、いわば「文理融合のアクティブラーニング」の実現に向けた試みの一つとして、大きな可能性を持っているのではないだろうか。